

# R7講評用紙考察

## 【コンクールから冬季演奏会まで】

提供された複数の講評用紙(地区大会、県大会、西関東大会、東日本大会、冬季演奏会、アンサンブルコンテスト)から、多くの審査員が共通して指摘している演奏の課題は、主に以下の5点に集約されます。

### 1. 強奏時(Tutti)のバランスと声部の明確化

多くの審査員が、**音が大きくなつた際(フォルテやTutti)**に特定のメロディーや聴かせたい声部が埋もれてしまう点を指摘しています。

- 同じ強弱記号でも、特に聴こえてほしいパートを際立たせるためのボリュームコントロールが求められています。
- 強奏時に主旋律が浮かび上がるよう、音量に頼らないコントロールやバランスの配慮が必要です。
- 打楽器と管楽器のバランスについても、強奏時に打楽器が先行したり、管楽器を打ち消したりしないよう注意が促されています。

### 2. 強奏における力みとサウンドの安定感

音量が上がる場面で、**力み(オーバーブロー)**が生じてサウンドの質が低下することが共通の課題として挙げられています。

- Tuttiで演奏する際に力みすぎてしまい、ホールの響きを十分に活かせていないという指摘があります。
- 強奏時に音が開きすぎたり、ピッチが不安定になつたりしないよう、脱力したブレンド音や冷静なコントロールが求められています。
- 弱奏(ピアノ)の安定感と強奏(フォルテ)のタフさのバランス、あるいは強弱によってサウンドが乱れない基礎的な能力が「宿題」として示されています。

### 3. ピッチとハーモニーの精度

個々の技術は高いものの、**アンサンブルにおける音程のズレ**が複数の大会で指摘されています。

- ユニゾンパートでのピッチのズレや、ハーモニーが不安定になる箇所が見受けられます。
- 特に木管楽器と金管楽器の間で音程の感じ方が異なる場面や、違う楽器同士のユニゾンでの注意が必要とされています。

### 4. 音色の変化と表現の多彩さ(色彩感)

演奏の雰囲気や世界観は高く評価されている一方で、**より豊かな音色の変化(カラーバリエーション)**を求める声が多くあります。

- 曲の中で音色や音質、表現の幅を広げ、単調にならないようメリハリをつけることが課題です。
- 場面ごとの音色の変化や、旋律の歌い方、ニュアンスの工夫を増やすことで、楽曲の魅力をさらに引き出せると助言されています。

## 5. 弱奏部における息のコントロールと安定感

静かな場面での表現についても、技術的な課題が指摘されています。

- 弱奏部で息のスピードが下がらないようにし、音が鳴りきっていない状態を避ける必要があります。
- フレーズの終わり(音が消える瞬間)まで自分の息を観察し、コントロールし続けることが求められています。
- 弱奏の場面でも、音量以上に音色や表情をしっかりと主張してほしいという期待が寄せられています。

総じて、開智未来高等学校の演奏は「雰囲気の良さ」や「高いポテンシャル」が認められていますが、強奏時のコントロール(バランス・力み)と、楽曲を通じた表現や音色の多様性をさらに突き詰めることが、共通して示されたレベルアップへの鍵と言えます。

# 強奏時(Tuttiやフォルテ)のバランスを改善するための具体的な助言

## 1. 役割の明確化と音量の引き算

多くの審査員が、「どのパートがメインなのか」を明確にすることを求めています。

- 同じ「フォルテ」という指示があっても、特に聴こえてほしい旋律やパートを際立たせるためのボリュームコントロールを行ってください。
- 主旋律が浮かび上がるよう、対旋律(カウンターメロディー)や伴奏の音量を落とすなどの配慮が必要です。
- 各自が自分の役割(主役かサポートか)をしっかりと理解し、アンサンブル全体のバランスを整えてください。

## 2. 「力み」を抑えたサウンドのコントロール

音量が上がるにつれて音が乱れたり、響きが損なわれたりするのを防ぐための助言が多数あります。

- 力みすぎて音が開きすぎないよう注意し、\*\*「冷静なコントロール」\*\*を心がけてください。
- 「楽に吹いている時」の美しい音色とハーモニーを強奏時にも維持できるよう、力み(オーバーブロー)を避け、脱力したブレンド音を目指しましょう。

- 音を無理に押し出すのではなく、\*\*「ホールの響きを上手に使う」イメージや、「楽に響かせるイメージ」\*\*を持つことで、豊かな音響が得られます。

### 3. 音量に頼らない表現と音色の工夫

単に大きな声を出すのではなく、音の質そのものを変化させることが推奨されています。

- 金管楽器においては、強弱を単なる音量差として捉えず、音の伸び、広がり、重さ、軽さなどをコントロールすることで、サウンドの色を変化させてください。
- 中低音パートや内声部は、強奏時こそ積極的に演奏し、サウンドの支えを強化する必要があります。
- mf(メゾフォルテ)以上のダイナミクスであっても、響きの豊かさや音色の質感を大切にしてください。

### 4. 楽器間のバランスと一体感

特定の楽器が突出しすぎないための具体的な注意点です。

- 打楽器と管楽器のバランスに注意し、強奏時に打楽器が管楽器を消してしまわないよう、または打楽器が音楽を適切にサポートできているかを確認してください。
- ファンファーレなどの場面では、音が開きすぎないよう、コンパクトにスピードの速い息で演奏することが有効です。
- 多声部が重なる場面では、メロディー以外の声部のハーモニーを整え、音楽をクリアに聴かせる工夫をしてください。

これらの助言を実践することで、強奏時でも音楽の構造が明確になり、より説得力のある豊かな演奏につながると考えられます。

## \*\*「霧囲気」や「ポテンシャル」\*\*

主に楽曲の導入部で作り出される独自の世界観や、個々の奏者の高い技術的基盤を指しています。

詳細は以下の通りです。

### 1. サウンドの「霧囲気」: 独創的な世界観と色彩感

審査員は、特に曲の冒頭や弱奏部で作り出される、聴き手を引き込むような空気感を高く評価しています。

- 冒頭の表現力: 複数の審査員が「とても良い霧囲気で始められている」、「冒頭の世界観、幻想的なサウンドの表現が素晴らしい」と述べています。
- 独創性と描写力: 「独創的な世界観」や「描写力の高さ」を感じさせる演奏であり、作り出す空気感が「素敵」、あるいは「オーラを感じる」といった極めて高い評価も見られます。

- 音色のキャラクター: 「透明感がありつつカラフルなサウンド」、「神秘的かつmisteriosa (神秘的)な色合い」、「しなやかで柔らかいSound」など、楽曲のムードを的確に捉えた色彩豊かな響きが評価の対象となっています。
- 和の響きへの挑戦: ブラスで「雅楽の響き」を表現しようとする試みが上手くアンサンブルされているという指摘もあります。

## 2. サウンドの「ポテンシャル」: 個々の能力とエネルギー

「ポテンシャル」という言葉は、バンドが備えている基礎体力や、さらなる高みへ到達できる可能性に対して使われています。

- 高い基礎能力: ある審査員は「バンドの能力に高いポテンシャルを感じる」と明言しています。その裏付けとして、「一人ひとりの技術が安定している」、「木管のサウンドがとても豊かですばらしい」といった個々の奏力の高さが挙げられています。
- 少人数を感じさせないパワー: 「少人数とは思えぬパワー」や「一人一人のエネルギーがとても良い」といった、個々の奏者の主体性と発信力の強さがポテンシャルの源泉として評価されています。
- 音楽への姿勢: 「音楽性を大切にし曲によりそう姿勢」や、「表現しようとする気持ちがとても伝わる熱演」など、技術を超えた音楽への意欲が評価されています。
- 期待感: 「期待感がある音楽作りが素晴らしい」と評されるように、今後の発展を予感させる演奏であることが示唆されています。

## まとめ

審査員が評価しているのは、単に楽譜通りに吹く技術ではなく、\*\*「楽曲の持つ神秘性や幻想的な雰囲気を、透明感のある色彩豊かなサウンドで描き出す表現力」です。そして、それを支える「一人ひとりの安定した技術と高いエネルギー」\*\*に、大きなポテンシャル(将来性や可能性)を見出していると言えます。

## 「高い技術的ポテンシャル」を、いかにして「説得力のある表現力」に変換するかについての具体的なヒント

審査員の助言に基づき、技術を表現に繋げるための練習アプローチを4つのステップで構成しました。

### 1. 役割の明確化と「引き算」のバランス練習

高い技術力があっても、全員が全力で吹いてしまうと旋律が埋もれてしまいます。表現をクリアにするためには、\*\*「音の整理」\*\*が必要です。

- 「聴かせたい声部」の徹底した優先付け: 同じ強弱記号であっても、主旋律(Theme)が浮かび上がるよう、伴奏や対旋律(Counter Melody)の音量を意識的に落とす練習を行ってください。

- 役割の理解：各自が「今は自分が主役か、サポートか」を常に自覚し、アンサンブル全体のバランスを整えることで、音楽の流れがより明確になります。

## 2. 「力み」を排した響きの質の追求

強奏時(fやTutti)に音が乱れると、表現が「単なる大きな音」に聞こえてしまいます。

- 「楽々響かせる」イメージ：強奏時ほど冷静になり、力み(オーバーブロー)を避けて、ホールの響きを上手に使う「脱力したブレンド音」を目指しましょう。
- 弱奏部での息のスピード維持：逆に静かな場面では、音が鳴りきらなくならないよう息のスピードを維持し、フレーズの最後まで「自分の息を観察し続ける」ことで、繊細な表現に説得力が生まれます。

## 3. 音量に頼らない「色彩感」の研究

「表現=音量の変化」という段階から一歩進み、\*\*「音色のバリエーション」\*\*を増やす練習が推奨されています。

- 多角的なコントロール(金管楽器など)：音量(ダイナミクス)だけでなく、音の「伸び」「広がり」「重さ」「軽さ」を個別にコントロールすることで、サウンドの色を変化させる練習を取り入れてください。
- 場面ごとのキャラクター付け：「主張する」「混ざる」「歌う」「真っ直ぐ吹く」など、場面ごとに求められる表現を具体的に話し合い、音楽に「彩り」を与えてください。
- 「可能性」の探求：表現の答えを一つに決めず、「こういう表現はどうだろう？」「こうはできないか？」とメンバーで可能性を探り続けることが、団体独自の「色」を増やすことに繋がります。

## 4. 息とフレーズの「可視化」と「先読み」

技術を音楽的な「歌」に繋げるための具体的な奏法への助言です。

- 息の方向を意識する：息の形を目に入れるものとして想像し、音が消えるその瞬間までコントロールし続ける練習が、フレーズ感の一体感を生みます。
- 2~3拍先をイメージする：発音の瞬間だけでなく、数拍先の音までしっかりとイメージした上で吹き始めることで、より美しいレガートやフレーズの繋がりが可能になります。
- 打楽器の「ロングトーン」化：打楽器も「叩く」だけでなく、管楽器のロングトーンのように「音を長く伸ばすイメージ」を持つことで、バンド全体とのアンサンブルが深まります。

## 結論としての練習の指針

審査員の一人は、あなたたちの水準であれば\*\*「そこからさらに可能性をさぐってみることが、自分たちの色を増やすことにつながる」\*\*と述べています。

単に「正しく吹く」練習から、「この音色でどんな景色を描きたいか」という意思を持って音を操る練習へとシフトすることが、ポテンシャルを表現力に結びつける最大の近道です。

# 対旋律(カウンターメロディー)の音量を適切に落とすための判断基準

\*\*「主旋律(メロディー)が物理的に、かつ音楽的に際立っているか」\*\*という点に集約されます。

具体的には、以下の5つの観点を基準にして音量をコントロールすることが推奨されています。

## 1. 主旋律が「浮かび上がって」聞こえるか

最も直接的な判断基準は、主旋律(**Theme**)が全体に埋もれず、明瞭に聞こえるかどうかです。審査員からは、強奏時に主旋律が埋もれてしまう箇所があるとの指摘があり、\*\*「主旋律を浮かび上がらせること」\*\*を最優先の目的として、対旋律のボリュームを抑える必要があります。

## 2. 「聴いてほしい声部」が明確になり、音楽の流れが改善されるか

単に音を小さくするのではなく、「その場面で最も重要な声部」が誰の目(耳)にも明らかになっているかが基準となります。対旋律の音量を適切に管理することで、聴き手にとって\*\*「音楽の流れ」\*\*がより良く感じられるようになること\*\*が、正しい音量設定の目安です。

## 3. 各奏者が自分の「役割」を理解できているか

アンサンブルにおいて、各自が\*\*「今は自分が主役(メイン)なのか、サポート(伴奏・対旋律)なのか」を自覚できているか\*\*も重要な基準です。自分がメインでないと判断した場合は、主役の邪魔をしない範囲まで音量をコントロールする自律性が求められます。

## 4. 楽譜の強弱記号(fなど)にとらわれすぎていなか

判断基準として重要なのは、楽譜に書かれた記号そのものではなく、「その場面で際立たせるべき音」との相対的なバランスです。たとえ全員が「f(フォルテ)」で演奏していても、特に聴こえてほしいメロディーやパートの音を際立たせるために、他のパートは一步引いたボリュームコントロールを行う必要があります。

## 5. ハーモニーとサウンドが「クリア」に保たれているか

対旋律を含めたメロディー以外の声部が主張しすぎると、ハーモニーが濁り、音楽が不明瞭になります。\*\*「声部が整理され、サウンドと音楽がクリアに聞こえる状態」\*\*になっているかどうかが、音量を落とすべきかどうかの判断材料となります。

## 練習へのアドバイス

強奏時に力みすぎると、対旋律などの周辺の音が膨らみすぎてバランスを崩しやすくなります。「力み(オーバーブロー)」を捨て、脱力したブレンド音を目指すことで、主旋律を邪魔しない適切な質感の対旋律を作ることができるでしょう。

